



第36号



ECOMAIL

関西 ECOMAIL

関西支部会員みなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員みなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座

00990-5-37886)

第55回 ワークショップのお知らせ

今月の関西支部主催のワークショップはありませんが、「阪神・都市ビオトープ・フォーラム実行委員会」主催のフォーラムに参加したいと思います。

『阪神都市圏 学校ビオトープ・フォーラム』

校庭の土・水・緑・生きもの

—共に生きる 学びの場づくり—

日時 1997年1月25日(土) 13:00~16:30

会場 尼崎市女性センター トレピエ

尼崎市南武庫之荘3-36-1 (☎06-436-6331)

参加費 500円(資料代)

問い合わせ 実行委員会事務局 (☎0722-41-3157)

パネルディスカッションのパネラーの方々

菅井啓之先生(大阪教育大学附属池田小学校)

辰見武宏先生(神戸市立御影小学校)

高島耕一郎先生(吹田市立山田中学校)

谷本卓弥先生(兵庫県立宝塚高等学校)

コーディネーター

牛尾巧先生(川西市教育委員会)



第36号 目次

- ・《関西支部 第5回研究大会 一般研究報告》
 - A会場「災害と環境教育」(佐藤孝則) ……2
 - B会場「一般報告」(田代智恵子) ……3
- ・《国際・公開シンポジウムの報告》
 - (赤尾整志) ……4~6
- ・第53回 関西ワークショップの報告
 - 環境教育シンポジウム
 - 「環境教育へのアメリカからの提言」
 - (木内 功) ……7~8
- ・ネットワーク ……9~10

A01.世論誘導の解析方法について--都市教育とリスク科学の視点から--

福島 古(グローバル環境文化研究所)

演者は、都市化率が76%を越えた現在において、さまざまな都市問題が顕在化していると前段で紹介し、都市に人口が集中したがゆえにリスクも増え、「負の世論誘導」が目立つようになったと説明。そこで、どのように「リスク・マネジメント」を行ったらいかがが今日的課題であり、その視点による研究がリスク科学であると解説。発表では、「多次元ベクトル」法を用いて、「正」「負」の世論誘導を具体的に解析した。発表後、「世論誘導の項目を、正・負どちらかのカテゴリーに簡単に分けられるのか。むしろ同じ項目でもある時期には正として、またあるときは負として分けられるものではないか」という質問も出たが、総じて、新しい視点での解析法であり、今後の更なる進展が期待される発表であった。

A02.身近な自然を生かした環境教育の実践--防災教育を意図した地域教材の開発と授業実践--

秋吉博之(兵庫県加西市立北条中学校)

演者は、前勤務校・兵庫教育大学付属中学校の在職中に起きた「阪神大震災」を契機に、この震災を経験したほとんどの生徒を対象にした防災教育のうちの、地学分野に関する実践例を紹介した。その結果、地震と深い関わりをもつ断層や不整合についての説明では、生徒毎に理解度に大きな差が認められた。例えば、「身近な地域の地殻変動」というテーマで夏休みに課題を与えたり、あるいは、自分たちが学ぶ中学校が六甲山の隆起に伴ってできた川の段丘面に建っていることを説明しても、「河岸段丘」は群馬県(教科書に載っている場所)にあるものと思っている生徒が多かったという。野外観察で得られた身近な地域教材よりも、いかに、総花的な教科書の知識の方がより強い影響を与えていたかが、この実践授業で明らかにされた。普遍的に見られる「河岸段丘」が、教科書を通して見ると生徒にはまるで特殊なものとして映る錯覚は、どの分野にも該当することである。このような実践例の報告が、期待されることである。

A03.社会環境教育としての技術科教育の検証--阪神大震災の仮設住宅用踏み台の製作授業を中心として--

上田 学(大阪教育大学・付属天王寺中学校)・橋本孝之(大阪教育大学)

演者らは、「阪神大震災の仮設住宅の高齢者に踏み台を製作して贈ろう」というプロジェクトを生徒たちと企画し、平成7年度に全国の中学校に呼びかけた。その結果、32校からの協力が得られ、ユニットバス出入口の高さ30cmを克服するための踏み台、合計1500個が寄贈されることになった。高齢者には30cmの高さは大問題であったことから、このプロジェクトの実施は大成功に終わった。この一連の経過の中で、踏み台づくりから参画していた生徒たちに、大きな変化が現われた。仮設住宅へ訪問したとき、実際に困っている高齢者の方に直に踏み台を手渡した生徒の顔が、その後生き生きとした表情の顔に変わったという。おそらく、受け取った側の高齢者たちの感激と、贈った側の生徒たちの感動がうまく共鳴したのだと思う。まさにボランティア精神の到達点であり出発点でもある。またその精神こそ、環境教育の原点でもあるように思われる。このような実践と発表が、おおいに期待されることである。

(文責:佐藤孝則)

- ①「環境教育の企業への展開について」 菊地泰博（兵庫県西宮保健所）
- ②「環境科学科専門科目『環境科学Ⅱ（社会科学分野）』授業内容の変遷」
田伏政昭・喜多嶋伸幸（和歌山県立向陽高等学校環境科学科）
- ③「カモシカ調査における環境教育」 本庄 眞（東榛原小学校）
パネル展示「『産業と環境』—和歌山市色抜き条例より—」
岸田光平・清水 理（和歌山県立向陽高等学校）

会場にいた人数は、10人ぐらい（発表者・座長・計時係を除く）であった。質疑応答も、比較的活発だったと思う。

まず、菊地さんは環境行政の立場から発表された。公害問題で槍玉にあげられて以来、それぞれの企業は環境を守る努力をしている。大企業なら、廃棄物・廃水処理だけでなく、社員などへの環境教育までするだけの力がある。しかし、地場産業を支える零細企業は（やる気があったとしても）そこまで経費がなかなか回せないで、行政が指導や啓発や支援をしなければならないという。また、環境教育の推進や企業・市民・行政によるパートナーシップを重視した兵庫県環境基本計画についての話もあった。

次に、和歌山県立向陽高等学校の先生からの実践報告があった。この「環境科学」という専門科目は2年生必修であり、自然科学系の「環境科学Ⅰ」と社会科学系の「環境科学Ⅱ」で構成されている。テーマは公害問題や都市の温暖化などから、エネルギー・人口問題など地球規模レベルまで扱っている。また、施設見学やコンピューター実習からディベートまで行っており、授業時間や担当教師が足りないことが課題だというのが、非常に工夫されているなあと感じた。

尚、会場の後ろにあったパネル展示はこれに関連したものである。「色抜き条例」は、和歌山市の地場産業である染色工業の廃水の浄化を定めている。そこから始まって、生徒達に家庭廃水を調べさせ、生活に密着した環境問題を扱うことから自分たちのライフスタイルを考えさせる試みは興味深い。

三番目に、本庄先生から山のカモシカ調査についての発表があった。農林業者と都会者とカモシカなどの野生動物との共存のあり方は難しい。食害が直接の生活を脅かす農林業者と種の絶滅を懸念して保護を訴える都会者との価値観には隔たりがあることと、実際に奥吉野の十津川で行ったカモシカ調査の様子とを、スライドを交えながら話された。（報告 田代）

2つの環境教育シンポジウムについて

赤尾 整志

1996年12月15日に日本環境教育学会主催で行った公開シンポジウム「震災体験と人々の意識変革一人と自然の共生を求めて」は、その前日14日に開催された甲南大学主催の国際シンポジウム「環境倫理と環境教育一人と自然の共生をめざして」と連動して行われた。共通の副題にみられるように、この両シンポジウムには深い関係がある。また公開シンポジウムのテーマは、大震災直後から関西支部の中心的研究課題として取り上げてきたものである。そこで関西支部ではひとつの節目になるように、15日の午前中から行われていた第5回研究大会の午後の行事として、この公開シンポジウムに参加し総括をすることとした。

◇ 国際シンポジウムのあらし

日本の環境教育は公害教育・自然保護教育・環境保全教育という経緯によって、今ようやく環境倫理を論じることのできる時期に到達した。この期を外さずに甲南大学では谷口先生が先頭に立たれて、環境倫理のシンポジウムを国際的視座で検証しつつ日本社会に向かって情報発信を行った。そして当然のいきさつであるが、この一私立大学の企画に、日本環境教育学会もエールを送った。

さて1日だけの日程であったが、その内容は小さな紙面ではとても書きつくせない重いものであった。あえて簡潔にいうならば、「バイオエシックスとは何か」この命題を参加者の一人ひとりが、さまざまな切り口から投げかけられたシンポジウムであった。このボールをキャッチした人も落とした人もあるだろうが、これからみんなで努力して投げ返さなければならない。その場合、沼田学会長が冒頭のごあいさつで述べておられるよう、「人と自然の共生をめざして」というシンポジウムの副題の意味をまずは「生物倫理」ととらえて環境教育の哲学とするべきであろう。

盛り沢山の内容の紹介はできないが、その中核となるものはアラン・ドレンゲソン氏（カナダ・ビクトリア大学教授）の記念講演「エコロジー哲学：倫理と教育一人と人、人と自然をむすぶ価値の架け橋」であったといえよう。もう少し補足的に説明すれば、人間が自ら根差す場（地域）に自らの賢明な生き方を探る学、エコロジー哲学、そしてその追求するものが「エコソフィ」である。さらに「エコステリー」にまで言及されているが、難しい内容なので今後の研究課題として言葉の紹介だけに止めておきたい。

シンポジストの発言はタイ・中国・ドイツそして日本・アメリカ（これは甲南大学の久武先生が話された）と、世界の国々の人（人間・社会）の生き方「エコロジカルな智慧」の話であったと思う。その概要は要旨集（緑表紙）を読んでいただきたい。シンポジウムの最後に大阪教育大学の鈴木先生が、環境教育とは現代文明の見直しを促す教育であるとして、内外のシンポジストの話をもとにして今後の環境教育は何を教材化して進めていくべきかについて示唆された。関西支部として勉強しなければならない課題が、今日のシンポジウムでまた多く与えられたようである。

◇ 公開シンポジウムのあらし

公開シンポジウムの核となるものは、前日の国際シンポジウムにもパネリストとして発言された大阪大学名誉教授中川米造先生の基調講演であった。先生はまた日本保健医療行動科学会の会長でもいらっしゃる。とくに関西支部の震災と環境教育の研究には、医学の人間学的視点から多くのご指導をいただいていた。14日の国際シンポジウムでは「生命の尊さと健康教育」について、「現代人は近代思想の影響で環境—自然の意味や働き—に対する感受性が低下し、ことの重大性（環境汚染と生命危機）を感知できなくなっている。そして近代医療に依存するあまり、人間としての主体性を放棄していることは憂慮すべきことである。これを教育によって行動変容させるためには、環境や自然との対話あるいは体験による気づきこそ本質的に大切ではないか」このように話されて、いま生命の尊厳を自覚するためにはなぜ環境教育なのか。その答えを与えていただいた。また15日の公開シンポジウムの基調講演では、「災害と人間の危機行動」と題して次のように話された。「災害は人間にとって『危機』であるが、対応の仕方によっては突発の事故によって落ちこんでしまうこと（偶発的危機）と、逆に成長の節目における試練になること（発達の危機）に区別される。そして危機は全人的な事態であり—（中略）—それぞれ個々の面の困難として対応しても生産的な解決にならないことに留意しておくべきであろう」として、分節化した近代社会における危機管理に落とし穴のあることを指摘された。とくに「危機対応のひとつの仕方として、生物学的と考えられる相互援助の行動（震災ボランティアのごとき）は、生命の長い歴史性に基づいた人間本来の行動でもあり」、それは環境教育におけるいのちの大切さ（尊厳）の意識化や人としての思いやりの心を育てるうえで重要な基礎となるものである。その意味において先生の基調講演は、震災を環境教育の課題として取り組んできた関西支部の今日までの研究に、明確な道筋をつけていただくものであった。そしてこの先生の講演の直後に行われたパネルディスカッションでは、期せずしてこのことが実際の実践報告としてパネリストによって語られた。

当日は5人のパネリストの発言があったが、このレポートではとくに被災地の真中で直後から被災した子どもたちに接し、彼らの気持ちを的確にキャッチして心のケアに生かした2人の教師の実践報告にまずスポットライトを当ててみたいと思う。その一人は、神戸市立御影小学校の辰見武宏さんの報告である。先生は「震災体験と小学生の意識変化」について「心のケアとビオトープづくり」という副題で話された。その実践のきっかけは、地震による恐怖感と無力感から『自分は親の足手まといではないか。どうして自分は役にたてないのか。』という子どもの悩み（子どもにとって心の危機）を知ったことであった。一方、『地震でつぶれた学校の池のかわりを、自分らの手で作りたい』という子どもの思いにも気づき、子どもたちによる校庭の池堀が始まった。これは震災の中で揺れ動く子どもたちの気持ちをとらえて、発達の危機（成長の節目）として見事に転化させた素晴らしい教育実践であったと思う。しかもその池づくりがビオトープという「生きものと共に生きる場所」づくりに向けられた

ことは、身をもって危機を助け合いながらくぐり抜ける体験をした、被災地の子どもならではの発想であったということができよう。子どもは本性的にいのちの生きる力をもっている。しかし辰見さんのように、その力をリアルタイムに引き出すことができる「先生」がいなかったら、このチャンスも生かすことができなかつたであろう。このことは、もう一人の報告者、北淡町立北淡西中学校の古川英治さんの実践についてもいうことができる。同先生の報告「震災体験と中学生の意識変化―大震災を通しての環境教育の実践―」によると、中学校は野島断層のある震源地付近にあって、直下型地震の恐怖と破壊による心の痛手の拭い切れない中学生が多くいたにちがいない。このような状況の中で3年生の理科と選択理科の授業をとおして、被害を科学的側面から検証するための被害調査を教材として取り上げた。そして結果を理科学習のデータとしてだけでなく、「地震と人間生活に関わるレポートを作成する」さらに「そのレポートを利用して、生徒一人ひとりに将来の町づくり、私たちの手で町を復興するにはどうしたらいいのか」について考えさせた。これも傷つきやすい中学生の心の危機を「被害調査と町づくり」という発展的な転向点としたことで、危機に対する積極的な教育実践であったといえよう。先生の実践のもうひとつの見方として、選択理科の授業で、地域の人に対して地震後の町の様子や、地震を経験して大切だと思ったことなど、地震に関するヒアリングと意識調査を実施したことである。そしてこのような中学生の学習活動に対して、地元の人たちも好意的に受けとめて協力してくれたことに注目しよう。大人の協力に勇気づけられた中学生が「人間ていいなあ」という意識をもつようになり、地域の人たちとの共感から「地震を後世に伝え、新しい町づくりにも生かしたい」と北淡町の復興に積極的な関心をもつようになった。このことは前日の国際ノンポジウムにおいてアラン・ドレングソン氏が述べた「エコソフィ」の概念の生きた実践であるということができよう。そしてこのような取り組みは、これからの環境教育の新しい領域としても非常に大切であると思われる。

パネリストの発言の順序について前後するが、神戸大学名誉教授の田中眞吾先生は「神戸付近の自然環境の成り立ちと震災」について、とくに今回の大震災は天災である前に神戸が大規模自然環境破壊の先進地であったことを指摘され、自然の大地を無視した開発の無謀を警告された。そしてそのような社会風潮には、教育とくに自然地理学的分野が高校教育の段階で地学分野に移されたことの問題点を指摘されたことは、環境教育にとっても耳を傾ける必要があろう。また大阪府青少年活動財団の木内功さんは、震災ボランティアなどとくにそのリーダー育成の豊かな体験の中から話をされて、子どもや大学生の意識変革には社会的な文化・価値観・マスコミ報道が大きな影響力をもっており、それらを社会運動的に発展させていくことの必要性を強調された。おわりにあたって甲南大学の谷口文章先生は「震災による心的外傷も意識変革による未来への心のもち方によっていやしは促進され、また修復された思考のネットワークの下でより高次の生き方を発見できるであろう」としてそのためには「人間と自然の共生」が前提となっていることを確認して、公開シンポジウムの締めくくりをされた。

上記表題で、環境教育学会関西支部及び財団法人大阪府青少年活動財団・社団法人日本キャンプ協会・大阪府キャンプ協会・大阪体育大学の主催でシンポジウムが10月24日に、青少年会館プラネットホールで開催されました。招聘講師は、モンタクリア州立大学SOC（ニュージャージー州立自然保護学校）所長のジョン・J・カーク氏、フロストバレーYMCA環境教育主任のクリス・L・ヘンカー氏、サンフランシスコのYMCAで活動されているヘザー・V・ストーン氏で、コーディネーターと通訳は、大阪体育大学の永吉先生と足立先生が担当されました。

平日にも関わらず、150名あまりの参加者で、一部立ち見の状態となり、その後の交流会まで部屋が一杯で、最後の締めとして関西支部の支部長、赤尾氏の挨拶まで盛況のうちに終わりました。以下それぞれの講演要旨を掲載いたします。

1. ジョン・J・カーク氏 —— 「アメリカにおける環境教育の動向」

「環境教育は、1960年代～70年代前半にかけて、アメリカの教育の確かな焦点の一つとなった。それは、1860年代から1940年代にアメリカの教育の一部となった自然保護／自然研究運動(Conservation/Nature Study Movement)と野外教育運動の自然な成果の結果である。私は、アメリカの教育で、25年を少し上回る程の間にそのような広範囲に受け入れられた運動を他に知らない。」と述べられ、その歴史として環境教育の発達に貢献した自然保護／自然研究運動、学校キャンプ・野外教育運動における一連の出来事を続けられました。自然研究／自然保護運動としては、下記の区分分けを

【気づきの時代】 the Awareness Phase	1860年代～1890年代
【保護の段階】 the Preservation Phase	1890年代～1910年代
【自然研究の段階】 the Nature Study Phase	1910年代～1930年代
【自然研究運動の教育段階】 the Education Phase	1930年代～1950年代
【カリキュラムの段階】 the Curriculum Phase	1950年代～1960年代
【野外教育における自然保護の段階】 the Conservation Phase	1960年代～

されて説明され、それと1930年代からの学校キャンプの成長が野外教育としての自然教育の発達を促し、60年代からは「沈黙の春」等の影響で、カリキュラム強調の時代から生物と無生物の全体世界における自分自身の位置と責任のより良い理解を、子供達に与えることが出来るよう、再検討・再探究する試みを引き起こしていると話され、最後に、田中正造の哲学はアジェンダ21の主要な焦点であり、世界のすべての人々が人生で働くための哲学を確立する基礎であらねばならない。これこそが今日の環境教育であると締めくくられました。

2. クリス・V・ヘンカー氏 —— 「フロストバレーYMCAの環境教育プログラム」

「フロストバレーYMCAは、NY州キャッツキルの山中にあり、約500エーカーの敷地に、宿泊キャンプ、会議、環境教育の施設を備えており、年間3万以上の人々がここを訪れ、1万2千人が環境教育に参加する児童や生徒たちです。」という施設の概要から講演を開始されました。そして、28年の歴史を持ち、現在では50種類の選択コースと23人の専属スタッフと2名のコーディネーターを配置しているそうです。

次にフロストバレーの環境教育の紹介がありました。構成要素として以下の活動が有り

ます。

- | | |
|--------------------|------------------|
| (1)授業の一環の学校宿泊プログラム | (2)高齢者ホステルプログラム |
| (3)地域社会への奉仕活動 | (4)国際理解のためのプログラム |
| (5)カリキュラムの開発 | (6)科学的研究 |
| (7)大学との共同研究 | |

そして、(1)から(7)までの紹介をスライドを通じてなされました。ここでは、(1)の学校の環境教育活動を掲載します。

フロストバレーの独自の目的設定として、以下のものがあります。

- | | | |
|-----------------|---|----------------|
| ○Leadership | □ | この頭文字をとってLASER |
| ○Acution | | (レイザー)と呼んでいる |
| ○Stewardship | | |
| ○Empowerment | | |
| ○Responsibility | | |

環境教育には50種類の活動があり、それらの中から学校が選択するわけですが、大きく4つのカテゴリーに分類されています。

- ①グループ形成や指導者の技能養成 —— グループワークのゲームやプロジェクトアドベンチャーなど
- ②文化的・歴史的な活動 —— 昔の生活技術や工芸技術活動及びネイティブアメリカンに伝わる工芸やゲームなど
- ③科学と自然 —— 森の生態や淡水の生態など自然のサイクルや相互関係など実際の体験を通して学ぶ
- ④レクリエーション —— ハイキング・クロスカントリー・カヌー等

以上4つのカテゴリーから選択するわけですが、フロストバレーではティーチングスタイルを重要視しており内容が何であれ「自覚に基づいた教育」を大切にしており、子供たちが探究し、発見していくのを奨励するスタイルで、子供たちが積極的に参加できる学習環境をつくり出すことに、ポイントを置いていることを強調されていました。

3.ヘザー・V・ストーン氏 —— 「地域社会における環境教育プログラムの展開」

環境教育や環境プロジェクトを若者や地域の人々に浸透させていくYMCAのプログラム[YMCA Earth Service Corps]の実践からの報告です。このプログラムは、若者たちを地域での自然保護活動・環境改善活動を奉仕活動として展開させていくための援助や、助言をする活動で、ワシントン州シアトルで発展させられたものと、カルフォルニア州のスタンフォード大学で考案された[Service Learning 2000]と呼ばれるプログラムの二つを基本にしています。

これらは、世界を改善していくためのもっとも確実なスタートラインは、現在の若者たちにあると考えており、その若者たちを優れたリーダーに育成するとともに、そのための最良の学習は、行動を通して達成されるとしています。つまり、学生たちが100本の木を植えるとき、ただ単に木を植えることだけが目的でなく、その前の計画を立て、電話をし、地域の人々と一緒に取り組みながらまとめていくという一連の行動に有ります。

以上 —— 文責 木内 功 (ユースサービス大阪)

(シンポジウムの詳細は、ユースサービス大阪へ —— 06 (942) 5146)

権原市昆虫館セミナー第20回記念

なつとわーく

「^{まんよう}万葉からの^{なが}いのちの流れ

「^{しぜん}自然と^{にんげん}人間との^{きょうせい}共生」

～ コスモスセミナー ～

今から約1,300余年前、奈良県権原市に日本最初の中央集権的都市である“藤原京”が設置されました。以来、権原市は、古くから自然とかがわった人々の暮らしが営々と続いてきた文化発祥の地であり、そして“万葉のふるさと”なのです。

一 権原市昆虫館は、自然教育へのニーズの高まりの中で、大和三山のひとつ“天の香久山”の麓に、平成元年にオープンして以来8年目を迎え、延98万人と越える方々にご来館いただいております。また教育普及活動に積極的に取り組み、その一環である「昆虫セミナー」も、第20回を迎える運びとなりました。

そこで、この度、権原市昆虫館セミナーの節目の記念事業とするために、「自然と人間との共生」と理念に掲げている(財)国際花と緑の博覧会記念協会と共催で、本セミナーを企画致しました。

今回のセミナーでは、昆虫と取り巻く自然の大きな営み、並びに権原市の歴史的特性である縄文、弥生、古墳時代、そして藤原京から現代に至る日本人の自然観、当時の生活様式等をテーマにして、学者、知識人に様々な角度から討議していただき、これからの自然と人間との新しい共生の枠組みを考え、それを広くアピールしようとするものです。

詳しくは、次頁をご覧ください。多数の方々の御参加をお待ち申し上げます。

1997年2月23日(日) 午後1時30分～4時
かしはら万葉ホール レセプションホール

●634 奈良県権原市小房町11番5号 ☎07442-9-1300(代)

権原市昆虫館

担当：日比伸子

〒634 奈良県権原市南山町624番地

TEL. 07442-4-7246

FAX. 07442-4-9128

次頁へつづく



第1部 基調講演 「ぼくが昆虫少年だったころ(仮)」
講師 日高 敏隆(滋賀県立大学学長/動物行動学)

第2部 パネルディスカッション 「人や昆虫、あらゆる生き物が生きている、ということは」
パネリスト 日高 敏隆(滋賀県立大学学長/動物行動学)
パネリスト 石野 博信(二上山博物館館長/環境考古学)
パネリスト 安曾田 豊(檀原市長)
パネリスト 【調整中】 (植物学)
コーディネーター 保田 淑郎(宝塚造形芸術大学教授/昆虫分類学)

主催 : 檀原市・檀原市教育委員会・(財)檀原市都市施設整備管理公社
(財)国際花と緑の博覧会記念協会

対象 : 小学校高学年(5・6年)以上 ~ 一般

申込方法 : 参加者の氏名(幼姓)、連絡先住所、電話番号、勤務先(学校名)、年齢(学年)
を明記の上、ハガキ・FAXいずれかの方法で、下記担当宛にお送り下さい。
(一通で複数の申し込み可) 定員300名(先着順の受付とします。)

入 場 無 料

檀原市昆虫館 「セミナー」係

〒634 奈良県檀原市南山町624番地 TEL.07442-4-7246 / FAX.07442-4-9128

関西E COMAIL

第36号 1997年1月20日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (TEL&FAX 0729-78-3381[直通])

第37号は 1997年2月28日発行予定 原稿必着期限2月23日

(原稿は下記 植田善太郎宛に直接郵便かFAXで送っていただいても
結構です。《早く記事になります》)

植田善太郎(広報委員) 〒592 堺市浜寺石津町東2-3-35

TEL&FAX: 0722-47-2751